

これから試したいこと

日本食べる通信リーグ
ゼネラルマネージャー
江守敦史

●訪米全体

昨年10月に参加した日米交流プログラムを通じて、仮説としてあるいは数字的に感じていた「生産と消費の分断が世界共通の課題」であることを実感した。『ヒルビリー・エレジー』の世界とNYのギャップが衝撃的だった。地方のネグレクトは現実だった。どの地域に伺っても「食べる通信」に興味を持っていただき、おそらく米国でも地域の課題解決ツールである「食べる通信」は有効であること、そしてその展開の可能性を強く感じた。



●印象に残った訪問先(そのエピソードや学び)

印象に残ったのは、「IターンではなくUターン」というネブラスカ・ライオンズ。アメリカほど国土の大きくない日本では、生まれ育った地域とは違う地域に移住することに対し違和感がなく、また個人の趣向や夢などによりIターンを選択する人は少なくないし、その獲得にコストをかける自治体は多い。明らかに国民人口が減っていくなか、流動的に各地域に関わる「関係人口」を増やすことを我々は提唱しているが、実際に住む住民を増やすという意味においては、この「IターンではなくUターン」は現実的だと思えた。進学や就職で地元



を離れた人に対する、電話や祭りなどでのくある種、営業的・宗教的とも思えるほどのUターンからのUターン誘致。これには可能性を感じた。関係人口やソーシャルな仲間作りにも流用できる手法だと思える。

●日本で、または自団体で“使えそう”だと思った考え方・概念・ツールなど

使えそうだと思った考え方やツールには、ネットワークを可視化する「スパイダーウェブ」、移住のトラッキングシステム、成功をみんなで祝うことなどなどがある。米国の地域プレイヤーが行っていることは日本の地域プレイヤーも行っているが、いずれもあと一歩足りてい

ないように感じた。また、パブリックデータを活用しての「分析・数値化」、仕組みや説明を図や写真などで一枚絵で表現する「可視化」、30 マイルミールやバイローカルファースといった「ネーミング」、などに巧みさを感じた。ビジョンとミッションに基づき、経営ボードが代表に対して人事を行うことにより、35 年、40 年といった長期活動を続けている団体を複数訪問した。組織が属人的になりがちな地域活動・ソーシャル領域において、こういった考え方は重要だと思った。



●実際に日本に戻って試したこと、試したいと思っていること

なかでも ACEnet が行っているネットワークの可視化は、試したいと思っている(がまだ実現できていない)。個人レベルのつながりまで見える化し、つながるメリットが「双方向であるか」を確認するもの。コレクティブインパクトで他者と組むときに用いたい手法であり、自分たちの弱点・足りないものを見出せるよい手法だと思う。

●日本での実践で米国の地域で試してもらいたいこと

米国の地域でもぜひ試してほしいには、食べる人とつくる人をつなぎ直す、食べもの付き情報誌「食べる通信」だ。日本 37 通信・アジア(台湾)4 通信で展開中のこの地域課題解決ツールを米国でも使ってみたい、創刊してみたいという団体があれば、お呼びいただければレクチャーに伺います。